

三世代の暮らしの変遷と住まいの機能の変化に関する研究

—子ども時代のライフスタイル比較を通して—

主査 定行 まり子*¹

委員 沖田 富美子*², 大高 真紀子*³, 鈴木 佐代*⁴, 江川 紀美子*⁵, 浅見 美穂*⁵

三世代の子どもの時代の暮らしの変化の分析から、各々の住まいが持つ機能と、その進化と淘汰の過程について考察を行った。今後のライフスタイルとしては、時間は睡眠とだんらんの時間を確保し、仕事や勉強は社会の仕組みと各人の自制が必要である。人との関係は個別化が進んでいるが、家事や趣味、会話を通じて繋がりを継続する余地がある。道具は、高性能・多機能化が著しいが、手作りや自然環境に則した生き方に見直す必要がある。住まいには生活行為に適応した緩やかな可変性や自由度が求められる。さらに暮らしを安定化させるための日々の変化に合わせて追従できる住まいであれば、家族が永く同じ地域に住み続けることが可能となる。

キーワード : 1) 生活行為, 2) 生活時間, 3) 三世代, 4) 家族, 5) 空間構成, 6) 居住歴

A Study on Changes of Daily Life and the Functions of Residential Space of Three Generations

—Through the Comparison of the Lifestyle during Childhood of Each Generation—

Ch. Mariko Sadayuki

Mem. Fumiko Okita, Makiko Ohtaka, Sayo Suzuki, Kimiko Egawa, and Miho Asami

We examine the changes of the functions of the residential space and the process in which the functions evolved or weeded out. Findings are as follows. As for work and study, we need to have a sense of self-control. We also need to maintain family relations through housework, hobbies and communications, and to review the way of life to meet the natural environment. As for residential space, flexibility and adaptability to fit the living activities are required. For our future lifestyle the above are necessary for us to live in the same neighborhood for a long time.

1. 序論

1.1 研究の背景と目的

本研究は、昭和初期から現在までの我が国における暮らしと住まいについて、子どもの立場から、暮らしの変遷と住まいの機能の変化を明らかにするために実施した聞き取り調査に基づき分析、考察している。調査対象は、住居学や建築学を専攻する大学生であるが、学生本人、その親、祖父母を含めた三世代への聞き取りを行った。対象とした世代は、図 1-1 に示すような三世代であり、暮らし方や価値観も大きく違う世代の体験を生々の声で聞き取っている。第 I (祖父母) 世代: 出生は戦前の 1930 年ごろで戦時中に青少年期を過ごしている。第 II (父母) 世代: 出生は、高度経済成長の真っただ中の 1960 年前後、青少年期を右肩上がりの経済の下に過ごしたが、途中で石油ショックを経験。第 III (学生) 世代: 出生は 1990 年ごろで小学生のときにバブル崩壊を迎え、以後デフレ期に青年期を過ごしている。

本研究は、こうした聞き取りを通じて、子ども時代の暮らしの変遷、住まいの機能の変化を明らかにし、持続

可能な住まいの価値を導き出すことを目的としている。それに加えて、住居・建築を学ぶ学生が、身近な対象を通して、激動の時代の暮らしと住まいの変化を見つめること、すなわち現代史を紐解く体験は、21 世紀の持続可能な社会に相応しい住まいを創造していく上で重要な教育となると考えている。

1.2 既往研究の考察と本研究の位置づけ

住まい方に関しての既往研究では、各ライフステージの住まい方調査に基づく暮らしの変化についての研究は数多い。家族成長期の住まい方では多羅尾らによる多世代居住の役割分担と空間の柔軟性についての研究¹⁾がある。新しい住まい方の可能性を提示しているが、従来の暮らしと現代の暮らしとの比較が行われていない。山野目らの研究²⁾では、伝統的住居と現代的住居の住まい方の比較から、伝統的住居における空間構成と居住者の家族関係の構築への影響に着目している。しかし暮らしの変化と関係性までは分析されていない。住まいの空間構成に関する既往研究では、住まいの中の生活行為と部屋の関係、部屋相互の繋がりと関係性、公私の関係や

*¹ 日本女子大学家政学部住居学科 教授

*² 日本女子大学家政学部 名誉教授

*³ 東京学芸大学 非常勤講師

*⁴ 福岡教育大学 准教授

*⁵ 日本女子大学大学院人間生活学研究所生活環境学専攻博士課程後期

個人領域の配列，生活との適合性や変更可能性などを扱った加茂らによる研究³⁾がある。子どもの遊び空間との関連では，高木らによる，廊的空間の行為の変遷を分析評価した研究⁴⁾がある。機能と影響を与える空間構成

の特質を扱っているが，三世代の暮らしの比較は行われていない。本研究は，三世代の住まい方と住空間の両側面に着目し，生活行為を柱に，生活時間，人との関係性，道具，空間構成を視点に分析を行う。

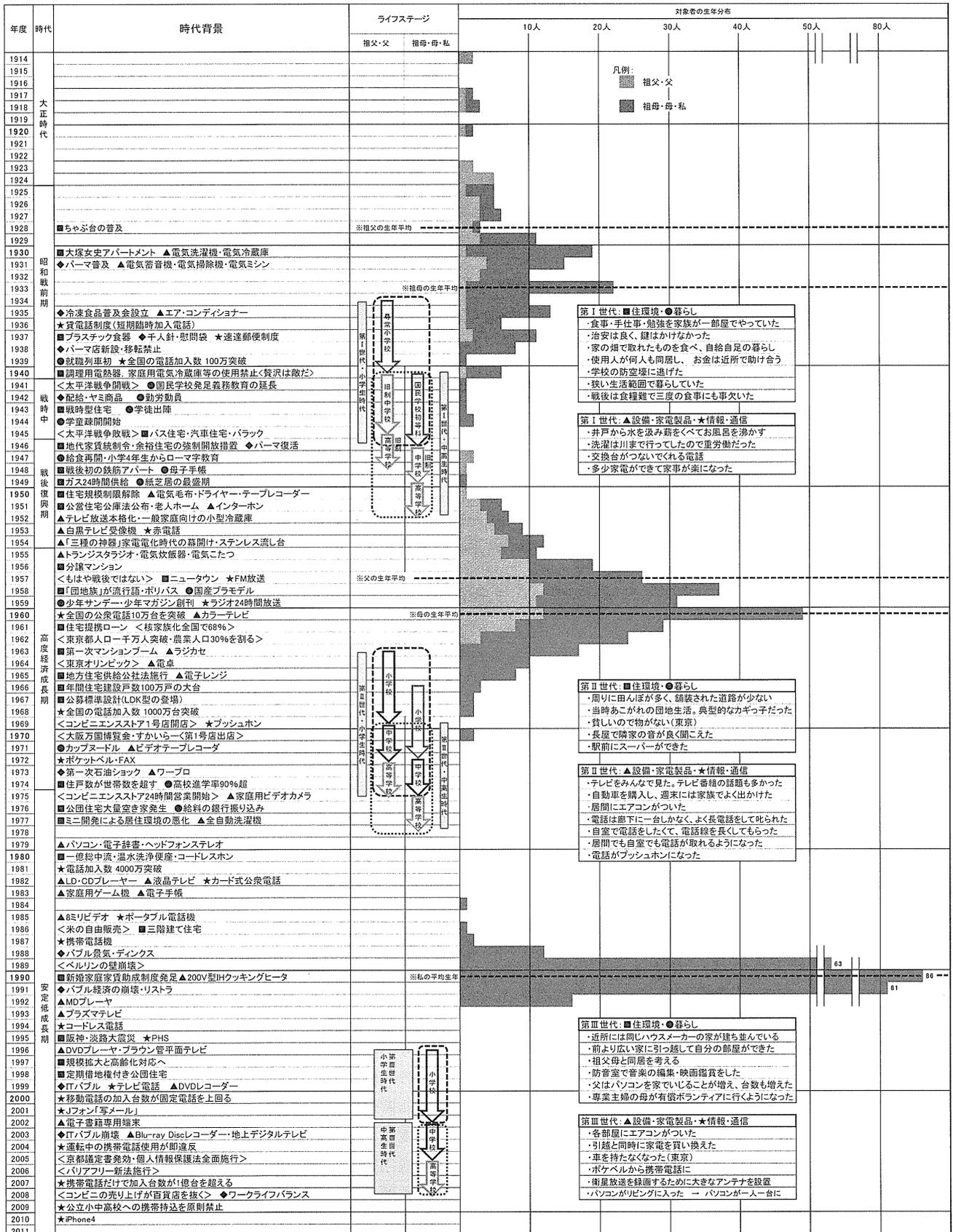


図1-1 三世代の時代背景と対象者(東京)の生年分布

1.3 調査概要と研究の枠組み

調査対象は（東京・大阪・福岡）の大学生とその家族の暮らしと、祖父母、父母を含む三世代の子どもの暮らしとする。調査方法は、学生が自らの生活と父母・祖父母から聞き取り作成した課題提出物の記述から、三世代間のライフスタイルの変遷と比較の分析を行う。東京における調査概要を表 1-1 に示す。各世代のライフステージの中で、住まいの機能が多く存在する家族成長期と家族成熟期に焦点を当て、小学生（6～12 歳頃）と中学生～高校生（13～18 歳頃）の住まい方と住空間を取り上げる。

調査対象の概要として、2010 年 2011 年のデータによる三世代の家族形態、兄弟数、居住形態、所有形態の変化を図 1-2 に、各時代の居住地域を図 1-3 に示す。家族形態は、核家族が増え、第 II 世代中高生時代以降は 80%以上となる。第 I 世代にある伯父叔母等を含む大家族は第 III 世代ではわずかとなる。兄弟数は第 I 世代では 4～10 人が 7 割以上であるが、第 II・第 III 世代では 1～3 人が 9 割以上となる。家族が縮小し細分化している。居住形態は、併用住宅は各世代にあるが、世代を追うごとに減少している。第 II 世代中高生時代に登場した集合

表 1-1 調査概要

調査対象者	調査対象 (人)	平均生年 (年)	最小-最大 (年)	平均年齢 (歳)	最小-最大 (歳)	標準偏差	
女子大生とその家族: 746名	第 I 世代	172名	1933	1917-1944	78	67-92	5.1
	祖母	39	1928	1914-1940	83	69-95	5.3
	第 II 世代	309名	1960	1949-1970	50	40-61	3.7
	母	95	1957	1947-1962	53	48-62	3.7
第 III 世代	262名	1990	1984-1992	20	19-23	0.8	
調査方法	大学講義の課題提出物の調査						
調査期間	2009年4月～2011年8月						
調査項目	住生活歴、家族構成、くらしの様子、家電製品、家具、居住形態、住まいの平面図						

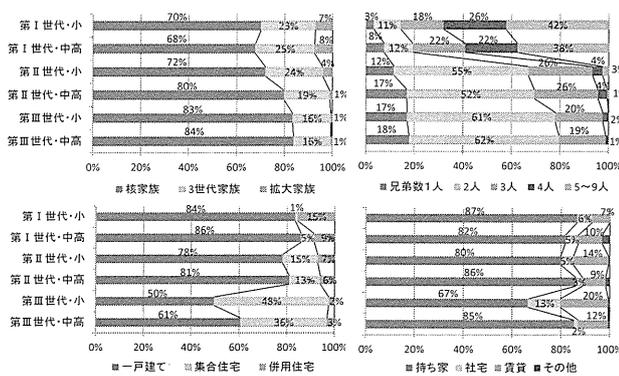


図 1-2 三世代の家族と住まいの概要

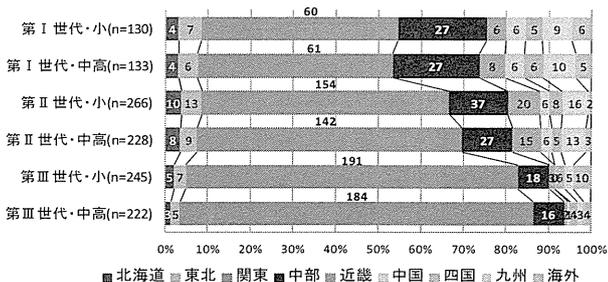


図 1-3 三世代の居住地域

住宅は、第 III 世代でその割合が増加している。第 III 世代中高生時代の集合住宅の割合は、2009 年から 2011 年の 3 年間にも 32%から 36%へと増加している。所有形態はどの世代も持ち家が最多であるが、小学生時代には社宅住まいも少数ながら存在する。

居住地域は、対象者の通う大学の所在地から第 III 世代では関東地方が 7 割以上だが、第 I・第 II 世代では関東地方を中心に全国に少数ずつ点在する。

2. 子ども時代のライフスタイルの変化

生活行為を必需行為（睡眠・食事・身支度）、拘束行為（仕事・勉強・炊事・掃除洗濯）、自由行為（会話交際・余暇趣味・休息）と分類し、生活時間、人との関係、道具、空間の視点から三世代の変化を分析した。主な生活時間の三世代変化を図 2-1 に示す。

三世代による相違がみられるかを小学生期、中高生期に分けて χ^2 検定を行った結果（表 2-1）、有意差が認められたものが多い。しかしながら、小学生期の寝室には世代の相違はみられず、どの世代も「兄弟同室」と「自室で単独で就寝」が約半数を占めている。また炊事をする人については、小学生期には「母」「母と祖母」などがみられ、三世代間に有意差が認められた（ $P < 0.05$ ）が、中高生期には、どの世代も「母」が多く、有意差は認められなかった。

以下に、三世代のライフスタイルの子ども時代の変化を、生活行為ごとに述べる。

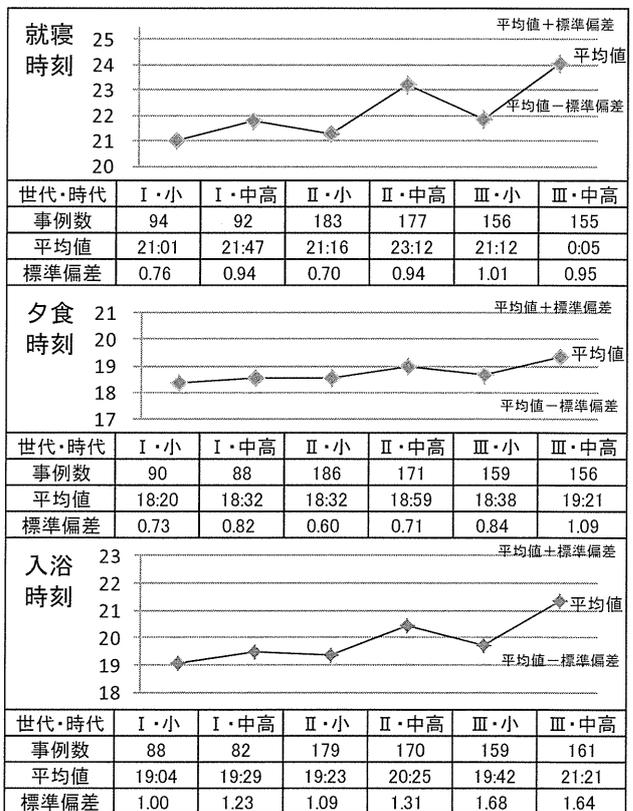


図 2-1 生活時間の三世代変化

2.1 睡眠 時間：起床・就寝時刻とも世代を追うごとに遅くなり、特に就寝時刻は遅延の幅や分布も大きくなっている。人との関係：家族全員での就寝から独り寝への変化がある。個室としての寝室出現率を図2-2に示す。三世代を通じて小学生時代には親や兄弟と寝室を共にする習慣がある。道具：布団から二段ベッドに、さらにベッドへと変化する。照明や空調の進化もみられる。空間：家族共有の和室から、洋室の個室へと変化する。特に第Ⅱ・第Ⅲ世代の中高生時代では専有個室での就寝率が高くなっている。

2.2 食事 時間：朝食はどの時代も平均7時前後で大きな差はない。夕食時刻は各世代共に学年が上がるにつれて遅くなる。特に第Ⅲ世代は顕著で、夕食時間帯の幅も広がる。人との関係：第Ⅰ世代では家族全員と一緒に食事をし、家父長をたてている。第Ⅱ世代では会社勤務の父の帰宅が遅いことが主な原因で、平日の夕食は母子のみの家族が増える。第Ⅲ世代では、さらに母の仕事や子どもの塾や部活動などの影響も加わり、家族と一緒に食事をする機会は減少する。道具：ちゃぶ台から食卓へ、空間：板の間、茶の間からダイニング、リビングへと洋式化している。また中食や外食も進んでいることが読み取れる。

2.3 身支度・生理・衛生 時間：入浴時刻は世代を追うごとに遅くなり、時間帯も広がる。人との関係：第Ⅰ世代は家族総出で水を井戸から運び、薪をくべて風呂を沸

かし、火加減を見ながらの入浴であった。銭湯へ母や友達と行く時代から、人手を要せず深夜や早朝でも入浴できる変化がある。道具：熱源の変化や設備機器の発展が著しく、追い炊き機能のため入浴時間に縛られず、個人の休息の側面も大きくなる。空間：屋外の便所や浴室が住まいの内部に取り込まれ、脱衣室の出現などの変化がある。洗面所では短時間に利用が集中し、家事や家族の会話の場など多機能な空間に変化している。

2.4 仕事 時間：第Ⅰ世代では農業・漁業に従事している事例が多く(職業が確認できたもので40%)、朝早くから日が暮れるまでの仕事時間である。第Ⅱ世代ではサラリーマン・共働きなど雇用・勤務形態が変化し、第Ⅱ世代中高生以降、特に父は遅くまで仕事をし帰宅が不規則になる。第Ⅲ世代では、さらに父の単身赴任や海外勤務・自営や母のパート・内職など、働き方や仕事の時間

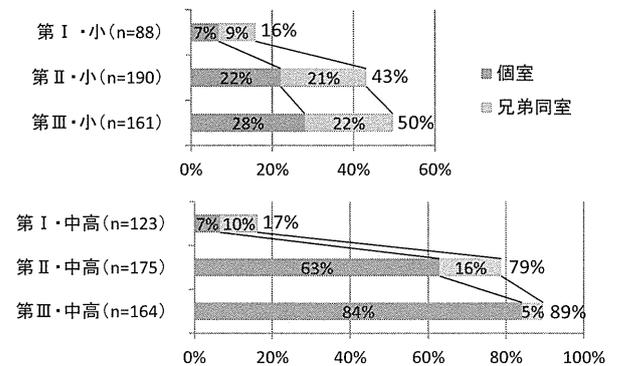


図2-2 三世代の個室としての寝室出現率

表2-1 世代によるライフスタイルの変化の検定 (2010年)

	小学生期			中高生期				小学生期			中高生期						
	I	II	III	I	II	III		I	II	III	I	II	III				
睡眠	寝具	布団	38%	40%	21%	63%	35%	2%	生理衛生	浴槽	五右衛門風呂	90%	10%	0%	71%	29%	0%
		ベッド	2%	31%	67%	4%	80%	16%			木製浴槽	53%	47%	0%	85%	15%	0%
		二段ベッド	0%	30%	70%	0%	15%	85%			タイル浴槽	0%	100%	0%	17%	83%	0%
	寝室	自室	7%	44%	49%	3%	43%	53%		ホロー	0%	33%	67%	0%	86%	14%	
		兄弟等同	10%	48%	42%	23%	61%	16%		ステンレス	0%	80%	20%	0%	92%	8%	
		和室	39%	44%	17%	57%	35%	7%		UB	0%	13%	88%	0%	17%	83%	
	寝室形態	親子	13%	32%	55%	67%	0%	33%		熱源	薪で沸かす	71%	29%	0%	89%	20%	0%
		兄弟同	26%	46%	28%	36%	47%	17%			石炭・ガス・灯油	7%	71%	21%	11%	80%	71%
		兄弟異	43%	25%	32%	67%	26%	7%			給湯器	0%	48%	52%	0%	0%	29%
	同室就寝	親兄弟	31%	35%	33%	93%	0%	7%		排泄方式	くみ取り便所	58%	42%	0%	69%	31%	0%
親兄弟		31%	35%	33%	93%	0%	7%	水洗トイレ	2%		61%	37%	6%	75%	19%		
祖父母		50%	25%	25%	0%	50%	50%	文机	93%		7%	0%	100%	0%	0%		
三世代	三世代	40%	60%	0%	100%	0%	0%	勉強機	机	14%	41%	45%	14%	42%	44%		
	独り	9%	47%	43%	6%	44%	50%		ちゃぶ台	91%	9%	0%	100%	0%	0%		
	独り	9%	47%	43%	6%	44%	50%		ちゃぶ台・机	0%	100%	0%	50%	50%	0%		
食事	食台	ちゃぶ台・座卓	62%	33%	5%	64%	34%	2%	勉強場	自室	4%	38%	57%	3%	44%	53%	
		食卓	3%	33%	64%	4%	38%	58%		兄弟等同室	10%	31%	59%	13%	58%	29%	
		炬燵	37%	59%	4%	47%	47%	5%		和室	57%	30%	13%	89%	11%	0%	
	相伴者	ちゃぶ台・炬燵	13%	73%	13%	20%	70%	10%	居間	27%	42%	31%	100%	0%	0%		
		食卓・炬燵	0%	50%	50%	0%	0%	100%	廊下等	17%	50%	33%	50%	50%	0%		
		いろり・お膳	100%	0%	0%	100%	0%	0%	かまど	90%	10%	0%	92%	8%	0%		
食事室	みんな	42%	38%	19%	52%	36%	12%	コンロ	かまど・ガスコンロ	63%	38%	0%	86%	14%	0%		
	夕食一緒	0%	25%	75%	0%	50%	50%		ガスコンロ	13%	68%	19%	14%	73%	13%		
	休日一緒	0%	0%	100%	0%	50%	50%		IH	0%	0%	100%	0%	20%	80%		
食事室形態	父以外	0%	56%	44%	0%	71%	29%	流し	井戸	70%	30%	0%	91%	9%	0%		
	そろわない	13%	38%	50%	3%	25%	72%		人研流し	48%	52%	0%	75%	25%	0%		
	各自	0%	50%	50%	0%	20%	80%		井戸・人研	100%	0%	0%	100%	0%	0%		
食事室形態	居間・洋室	36%	44%	20%	37%	41%	22%	炊事場形態	SS流し台	0%	76%	24%	8%	79%	13%		
	食堂	27%	55%	18%	9%	37%	9%		人研ぎ・SS	0%	100%	0%	0%	100%	0%		
	台所・板の間	50%	30%	20%	22%	11%	7%		独立	31%	40%	28%	34%	40%	26%		
食事室形態	LD	1%	21%	78%	2%	37%	139%	炊事場名称	対面	0%	0%	100%	0%	0%	100%		
	キッチン	0%	0%	100%	2%	2%	2%		DK	10%	71%	19%	9%	80%	11%		
	DK	0%	85%	15%	2%	37%	2%		LDK	0%	19%	81%	0%	19%	81%		
食事室形態	茶の間・和室	55%	42%	3%	41%	30%	0%	接客の場	対面LDK	0%	0%	100%	0%	5%	95%		
	座敷	100%	0%	0%	7%	0%	0%		台所	29%	42%	30%	31%	40%	30%		
	和室	49%	48%	3%	58%	38%	3%		台所	70%	30%	0%	72%	28%	0%		
食事室形態	洋室	5%	33%	61%	5%	41%	55%	接客の場	土間・勝手	0%	0%	100%	0%	0%	100%		
	板の間	76%	24%	0%	74%	26%	0%		キッチン	2%	26%	72%	6%	25%	69%		
	接客の場	母が料理	19%	34%	47%	24%	31%		45%								
接客の場	祖母	0%	50%	50%	25%	25%	50%										
	母と祖母	57%	14%	29%	50%	25%	25%										
	姉妹	100%	0%	0%	100%	0%	0%										
接客の場	母と姉妹	83%	38%	0%	42%	58%	0%										
	女中	83%	17%	0%	75%	25%	0%										
	母と女中	100%	0%	0%	100%	0%	0%										
接客の場	父	-	-	-	0%	0%	100%										
	母と父	-	-	-	0%	0%	100%										
	全員	-	-	-	0%	0%	100%										
接客の場	ほうき	73%	27%	0%	86%	14%	0%										
	掃除機	0%	48%	52%	2%	60%	38%										
	掃帚・掃除機	0%	80%	20%	11%	67%	22%										
接客の場	洗濯方法	91%	7%	2%	100%	0%	0%										
	洗濯機	0%	53%	47%	6%	39%	55%										
	手洗い・洗濯機	0%	100%	0%	67%	33%	0%										
接客の場	二槽式	0%	76%	24%	0%	95%	5%										
	全自動	0%	6%	94%	0%	18%	82%										
	ドラム式	-	-	-	0%	38%	0.63										
接客の場	居間・L	22%	35%	43%	21%	37%	42%										
	和室	54%	43%	4%	65%	25%	10%										
	板の間	100%	0%	0%	-	-	-										
接客の場	TV	2%	48%	50%	6%	46%	48%										
	ライオ	100%	0%	0%	100%	0%	0%										
	TV・ラジオ	0%	100%	0%	38%	50%	13%										
接客の場	ちゃぶ台	44%	41%	15%	57%	29%	14%										
	食卓	3%	53%	44%	8%	40%	52%										
	ちゃぶ台・食卓	0%	0%	100%	0%	50%	50%										
接客の場	ソファ	12%	24%	64%	7%	53%	40%										
	ちゃぶ台・ソファ	0%	0%	100%	0%	33%	67%										
	食卓・ソファ	0%	5%	95%	0%	11%	89%										
接客の場	客間	63%	32%	5%	45%	45%	10%										
	応接間	23%	62%	15%	20%	80%	0%										
	和室・座敷	35%	54%	11%	48%	45%	7%										
接客の場	土間・玄関	67%	33%	0%	75%	0%	25%										
	庭	0%	75%	25%	0%	0%	100%										
	接客の場																

は多様になる。人との関係：第Ⅰ世代は子どもを含め家族みんなで生業に取り組んでいる。第Ⅱ世代にはミシンで子どもの洋服を作る母が多くいる。道具：農耕具の機械化や、第Ⅱ世代後半以降のパソコンなどの情報通信手段の進化が著しい。空間：第Ⅱ世代で会社などの外へ出て行った仕事場は、第Ⅲ世代で父母の仕事の場所として居間・寝室・書斎など住まいの中に点在するようになる。

2.5 勉強 時間：第Ⅰ世代では戦中戦後の混乱期で勉強より家の手伝いが優先された記述が多い。第Ⅱ世代では勉強が忙しくなり、夜遅くまで勉強する様子が見られる。第Ⅲ世代ではさらに塾・習い事で忙しさは増す。人との関係：兄弟一緒に勉強から、第Ⅱ世代では勉強に母が関わり、第Ⅲ世代では塾の送迎や夜食作りなどを母がする。勉強の道具（図 2-3）：三世代とも机の存在が大きく、第Ⅲ世代では部屋にテレビやパソコンなど、自分専用の持ち物が多く持ち込まれる。空間：第Ⅰ世代には専用の場所がなく、第Ⅱ世代以降は主に自室であるが、居間で行う例が三世代で小・中高生共にみられる。

2.6 炊事 時間：特に第Ⅰ世代では、冬の朝が冷えたことが記述されている。炊事を主に行う人：第Ⅰ世代では女中の存在があるが、三世代とも母や祖母・姉妹など女性中心であることに変わりはない。第Ⅲ世代に料理に凝る母や、父や子どもが参加する様子もあり、暮らしの楽しみの要素もみえる。道具：かまどや人研ぎ流しでの第Ⅰ世代の作業は苦勞を伴うものであったが、食物の保存に工夫を凝らすなど自給自足の暮らしであった。電気冷蔵庫や炊飯器などの家電製品の急速な普及と給湯設備の進化により、炊事に伴う負担は軽減された。第Ⅲ世代では家電はさらに多機能になり、炊事方法も変化している。空間：外や北向きの土間の第Ⅰ世代の台所から、第Ⅱ世代ではダイニングキッチン、ステンレス流し台に代表されるように炊事空間が近代化する。

2.7 掃除・洗濯 人との関係：炊事と同様に子どもが掃除・洗濯を手伝う機会は減り、主に母の役割であることはあまり変化していない。道具：はたきとほうきを使用する掃除、川や井戸で手洗いする洗濯から、家電の進化

により家事労働が軽減された過程が読み取れる。第Ⅲ世代では掃除道具はさらに多様かつ高性能になる。

2.8 だんらん 時間と人との関わり：第Ⅰ世代は夕食後、祖父や父を中心に家族みんなで一日の出来事を語り合っていた。第Ⅱ世代にはテレビが入り、家族間でチャンネル争いも始まる。第Ⅲ世代では、家族は寝る前のわずかな時間帯以外はなかなかそろうことが難しく、週末の夜以外は居間がペットの居場所になる事例もある。一方、家族が一緒のときには長く話し込む様子も見られる。道具：ラジオから白黒テレビ、カラーテレビがだんらんの場に登場し、所持台数も増える。第Ⅲ世代では MD, CD, オーディオセット, DVD など、家族が過ごす場での道具が多種になる。家具はちゃぶ台からテーブルとソファに変化するが、こたつは三世代ともにみられる。空間：板の間や茶の間からリビング(座式からいす座)へと変わり、部屋の装備も充実していく。

2.9 接客 時間と人との関わり：第Ⅰ世代は冠婚葬祭を住まいで行っていた。日頃から近所や親戚の人が出入りし、子育てや日用品の貸し借りもしていた。第Ⅱ世代は親戚が訪れるのは盆暮れくらいで、近所の友人や会社・学校関係の知人とのつきあいが主となる。第Ⅲ世代では来客は年に何度かというほどになる。道具：第Ⅱ世代小学生時代に普及したばかりの電話は、近所の人にも取り次がれていた様子がわかる。

2.10 余暇・趣味 人との関わり：第Ⅰ世代の子どもは幼い兄弟の世話をしながら異年齢の子どもたちと、第Ⅱ世代は近所の仲間を集めて、第Ⅲ世代では一人や少数での遊びが多くなる。道具：第Ⅰ世代はおもちゃがなく自分たちで工夫して遊んでいた。第Ⅱ世代ではピアノや絵画教室等の習い事を始める子も多く、映画や漫画など映像文化の発達により、家族で余暇を楽しむ機会が増えている。空間：野山を駆け回る第Ⅰ世代、空き地や路地、小学校や公園で過ごす第Ⅱ世代、行動範囲は広がる反面、室内での映像音楽関連の趣味が主となる第Ⅲ世代、などの変化がみられる。

3. 三世代の暮らしと住まいの空間構成の類型

三世代の住まいの空間構成の分析には、対象の学生(2010年:89人)のうち、三世代の子ども時代の住まいと住まい方を把握できた延べ471例を抽出した。住まいの類型は①和室続き間型(土間有り)、②和室続き間型(土間無し)、③nLDK型、④長屋形式、⑤塔状住宅、⑥集合住宅に大別した。ここで和室続き間型は、二室の開放度合いや用途は問わず二室以上隣接する和室が1階に存在するもの、nLDK型は、洋室の居間に二室以上の個室(和洋は不問)のある戸建て住宅、塔状住宅は3階(以上)建ての戸建て住宅と定義する。三世代の暮らしと住まいの類型の変化を図3-1に、住まいの類型の三

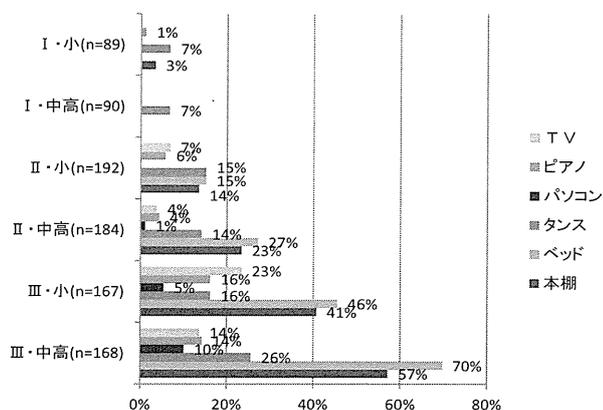
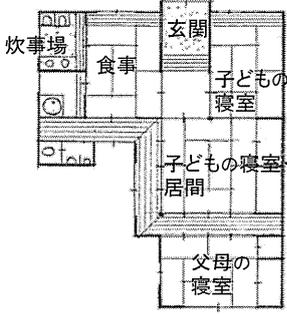
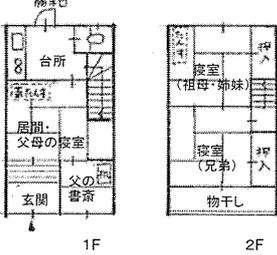
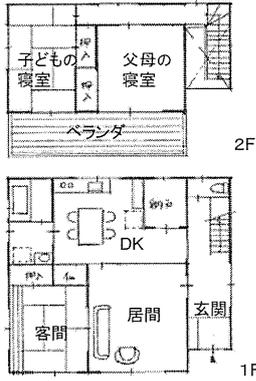
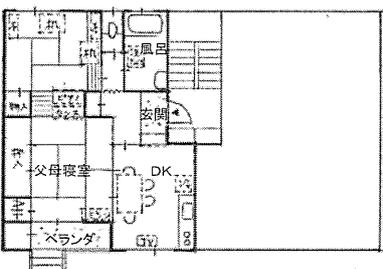
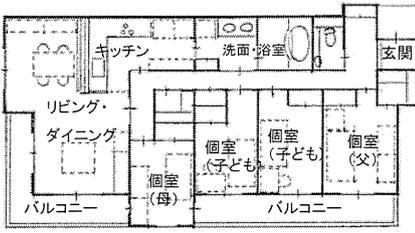
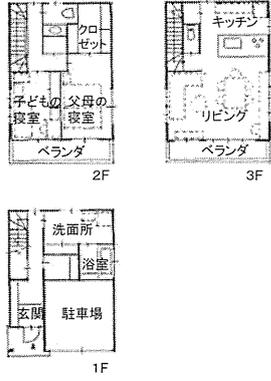


図 2-3 机のある部屋にある道具の三世代変化

住まいの類型と暮らし		道具と暮らし	
②和室続き間(土間無) 構造: 木造平屋建て 場所: 神奈川県 家族: 父母、子5人 新築年: 1932年		④長屋 構造: 木造2階建て 場所: 東京都 家族: 祖母、父母、子5人 新築年: 1918年	
			
<ul style="list-style-type: none"> ・風呂がなく、近所のお風呂を借りることもあった ・ご飯を食べる6畳に皆が集まった ・茶殻を畳に撒き、ほうきで掃いた 		<ul style="list-style-type: none"> ・兄弟みんなで一つの文机で交替で使った ・近所で子どもを預かったり、醤油の貸し借りをした ・兄弟と姉妹で分かれて寝ていた 	
③nLDK型 構造: 木造2階建て 場所: 神奈川県 家族: 父母、子2人		⑥集合住宅 構造: RC造5階建て 場所: 東京都 家族: 父母、子2人 新築年: 1965年	
			
<ul style="list-style-type: none"> ・姉妹で同室だったが受験の時は一人部屋に ・シャワーがついて洗髪が楽になった ・深夜ラジオを聞きながら夜更かしをする 		<ul style="list-style-type: none"> ・近所の人に電話があると呼びに行った ・下校後、荷物を置きすぐに遊びに行った ・ピアノを習い始めて、畳の部屋に置く 	
⑥集合住宅 構造: RC造 場所: 東京都 家族: 父母、子2人		⑤塔状住宅 構造: 木造3階建て 場所: 東京都 家族: 父母、子1人 新築年: 2005年	
			
<ul style="list-style-type: none"> ・洗濯機と乾燥機が一つになり洗面所が広がる ・朝食は出かける時間が皆違うため各自で ・友達が遊びに来たときはリビングか自室で 		<ul style="list-style-type: none"> ・犬中心の生活になり、主にリビングで過ごす ・各自好きなときに入浴する ・掃除は主に母の役割、休日には父も手伝う 	
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 20%;"> <p>1925 冷蔵庫(氷)</p> <p>かまど</p> <p>大研ぎ流し</p> <p>蚊帳</p> </div> <div style="width: 20%;"> <p>1935 ラジオ</p> <p>1936 電話</p> <p>たらい・洗濯板</p> </div> <div style="width: 20%;"> <p>1952 電気冷蔵庫</p> <p>1954 (二槽式) 電気洗濯機</p> <p>1956 ガスコンロ</p> <p>1957 電気炊飯器</p> <p>1970 二段ベッド</p> <p>1970 ベッド</p> <p>1975 食器乾燥機</p> <p>1988 電子レンジ</p> <p>1995 IHコンロ</p> <p>2000 食器洗い機</p> </div> <div style="width: 20%;"> <p>1952 白黒テレビ</p> <p>1960 カラーテレビ</p> <p>1966 FAX</p> <p>1972 クーラー</p> <p>1976 ワードプロ</p> <p>1987 パソコン</p> <p>1989 全自動洗濯機</p> <p>1996 携帯電話</p> <p>1996 床暖房</p> <p>2000 インターネット</p> <p>2000 ドラム型洗濯機</p> <p>2003 液晶テレビ</p> </div> </div>			
※道具の年号は記述の初出を示す			

世代変化を図3-2に示す。

第I世代では小学生から中高生時代に大きな変化はなく、長屋形式が少数あるほか90%以上が和室続き間型で、その半数以上が土間有りである。階数は60%以上が平屋で、和室続き間型は第II世代では約半数を占めるが、第III世代ではわずかとなる。第II世代では小学生から中高生時代への変化が大きく、第II世代で出現するnLDK型が増加する。集合住宅も第II世代で出現するが中高生時代で減少し、子どもの成長と共に持ち家を指向する傾向が読み取れる。第III世代ではさらにnLDK型が増加し、集合住宅と併せて住まいの大半を占める。第III世代で出現する塔状住宅は、すべて東京都内の例である。和室続き間型には様々な部屋の繋がり方があり、住まいの形は多様だが、nLDK型や集合住宅の構成は似た型が多く、画一化の傾向にある。

居室以外の空間では、縁側や廊下、水回りがあるが、縁側は和室続き間とほぼ一緒に推移し、第I世代に60%以上あった縁側は第III世代にはなくなり、替わってベランダやバルコニーが登場し、戸建て・集合住宅共に増加する。水回りでは第I世代には浴室や便所が屋外にある(15%)、洗面所がない(50%)等の住まいがあるが、第II世代では各々1/5程に減少し第III世代ではみられない。

住まいの機能としては、三世代の暮らしの変化の過程における「仕事」や「接客」行為の淘汰が空間構成上でも裏付けでき、第III世代では住まいに仕事場や客間がある例はわずかである。しかし第II世代のnLDK型に、仕事場と客間の空間はあるが用途が異なっている例もある。同様の例として寝具が布団からベッドへ移行する過程には、畳にベッド、板張りに布団の例や、ピアノが和室の茶の間や座敷に置かれる例が、第II世代に散見され、暮らしと住まいの構成・機能の関係には位相がみられた。

4. 住み続ける家族と住まい

対象の第III世代180事例(2009年91, 2010年89)のうち、同じ地域に30年以上住み続けている例は47事例確認できた(第I・II・IIIが11事例、第Iから第IIのみが11事例、第IIから第IIIのみが25事例)。3事例の住まいと住まい方の変化を図4-1, 4-2, 4-3に、47事例の

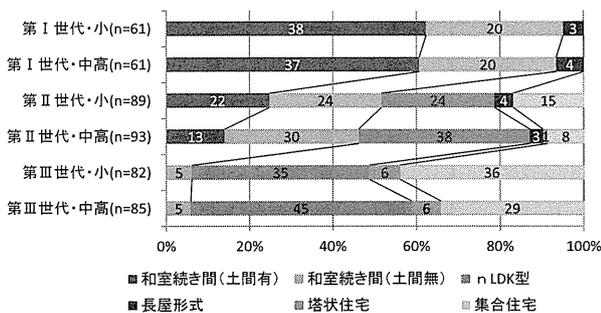


図3-2 住まい類型の三世代変化

うち現在も学生が三世代同居をしている29事例の居住歴一覧を図4-4に示す。47事例の家族は、ライフステージごとに家族構成が刻々と変化している。第I世代で誕生から現在まで住み続けているのは8事例、結婚から現在まで住み続けているのは5事例である。第II世代で誕生から現在まで住み続けているのは8事例のみで、28

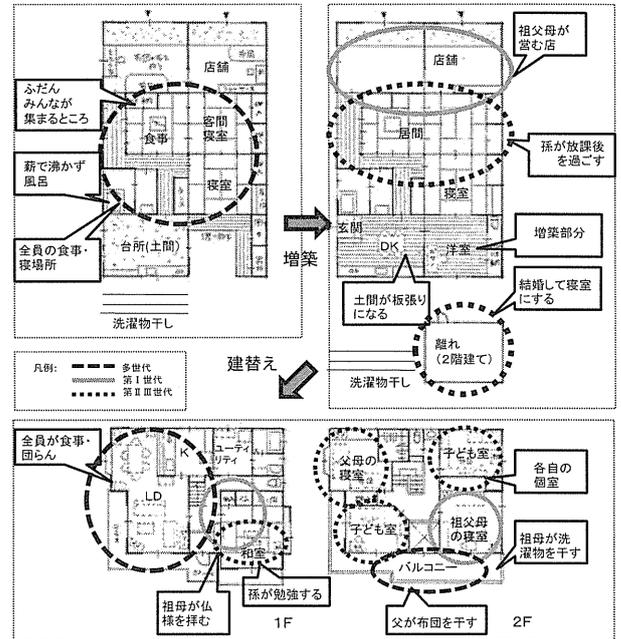


図4-1 同じ地域に住み続ける事例(図4-4の③)

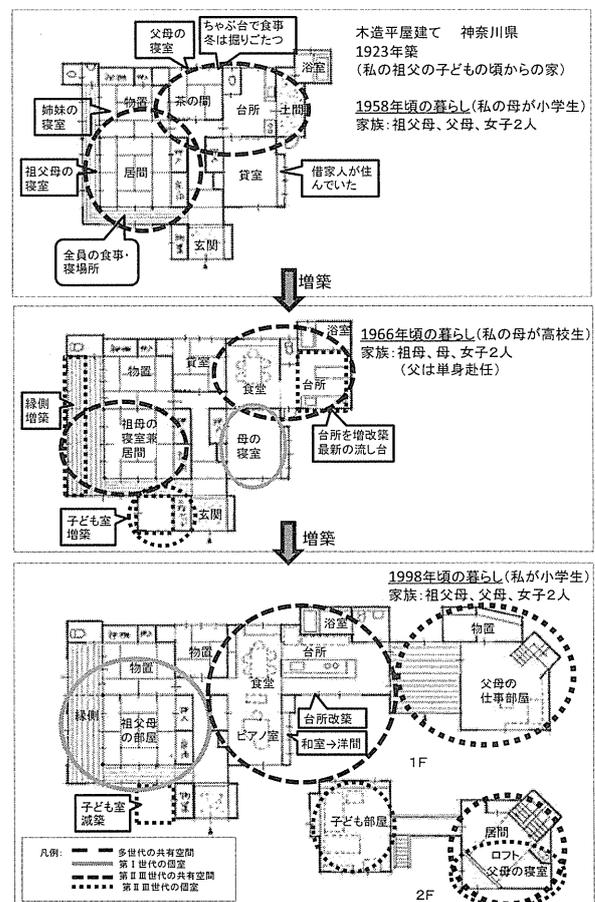


図4-2 同じ住まいに住み続ける事例(図4-4の⑥)

事例は途中で生家を離れ後に再び同居している。離家の理由は、就学・就職・結婚・転勤などである。再同居の理由は、「子どもが生まれて」「母が仕事を始めて」「転勤を終えて」「祖父の死亡」など人の暮らしの変化のほか、「水回りをリフォームして」「大改修をして」「建替えを機に」等、住まいの修繕・更新サイクルに起因するものもある。

また、新築時には住まいに農家・医院・小売店・鉄工所などの、生業の仕事場を有していた事例が 21 件ある。近くに住まいを建替えた後も既存の店部分との行き来をする例や、生産物の貯蔵庫や飼育場所が、生業の縮小と共に家族の個室へと変化する過程を経ている。

同じ地域に継続して住む 47 件の家の新築年は 1862 年～1980 年である。現存するのは 15 件で、22 件は 1968 年～2002 年に同じ地域で建替えを行い住み続けている。居住歴によるとどの家もさまざまな増改築を行っている。子ども室等を増築した例が 22 事例あり、そのうち平屋を 2 階建てにした例が 7 事例ある。また土間部分や和室を板張りにする、水洗便所にする、アルミサッシにする、床暖房を付ける等の改修も行われている。さらに二世帯同居に併せて増改築や建替えを行った例が 26 事例ある。居住形態は、47 件全てが一戸建て持ち家であり、敷地内に離れを持つ事例が 5 件ある。

世代や家族によって暮らしの様子は多様性に富んでいるが、対象事例から三世代に渡り同じ地域に永く住み続ける要因として、①生業を持つなど地域に根ざすものが

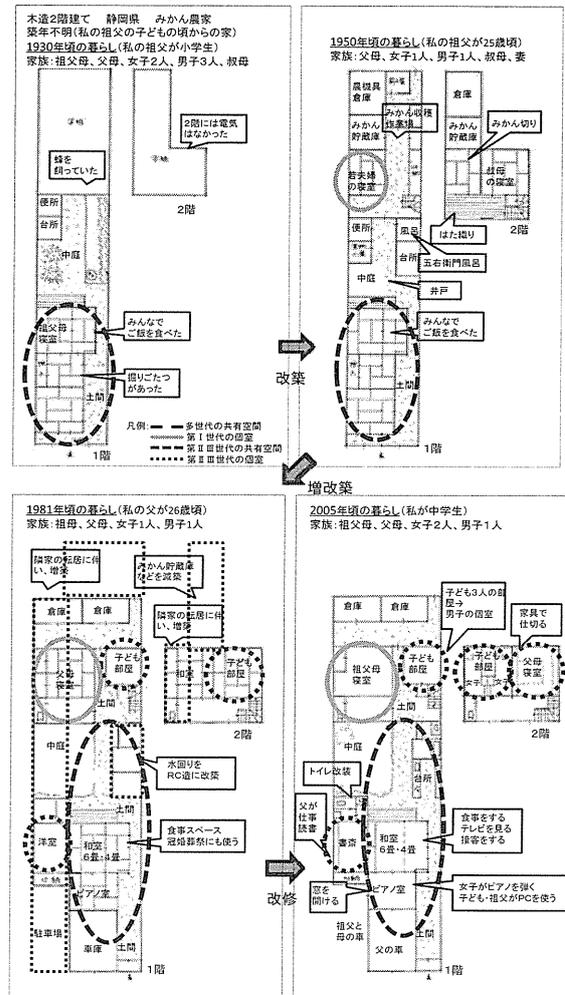


図 4-3 同じ住まいに住み続ける事例 (図 4-4 の④)

no	1862	1915	1920	25	1930	35	1940	45	1950	55	1960	65	1970	75	1980	85	1990	95	2000	5	2009	
1	1862										7人									7人		▲建替
2																						
3																						
4																						
5																						
6																						
7																						
8																						
9																						
10																						
11																						
12																						
13																						
14																						
15																						
16																						
17																						
18																						
19																						
20																						
21																						
22																						
23																						
24																						
25																						
26																						
27																						
28																						
29																						

図 4-4 同じ地域に住み続ける家族の居住歴

あり、廃業後も通勤圏内に勤務先を持つこと、②住まいの維持管理や暮らしの変化に応じた改修や建替えを行っていること、③住まいや敷地は、増改築が可能な構造や所有形態であること、さらに④三世代の暮らしが重なる時間と場所が住まいの中に存在すること、が挙げられる。時代とともに失われた、家族が協力して暮らしと住まいを成り立たせる機能を有していることがうかがえる。

5. 福岡と大阪地域の住まいと暮らしの変化

本調査は、前述した東京の大学生を中心に実施した調査に準じて実施したものである。大学生本人、父母、祖父母それぞれの子ども時代（小学生 6～12 歳）に居住していた住宅と暮らしについての結果をまとめる。調査対象の概要を表 5-1 に示す。

表 5-1 調査対象(福岡・大阪)

調査対象者	学生とその家族	調査対象(人)	平均生年(年)	最小-最大(年)	平均年齢(歳)	最小-最大(歳)	標準偏差		
女子大生とその家族(福岡)	第 I 世代 29名	祖母	15	1933	1916-1946	77.8	65-95	7.6	
		祖父	6	1934	1927-1946	77.3	65-84	6.6	
		不明	8	1937	1930-1943	74.1	68-81	3.8	
	第 II 世代 37名	母	24	1962	1954-1970	48.8	41-57	4.4	
		父	9	1959	1953-1970	51.9	41-58	5.9	
		不明	4	1963	1960-1965	48	46-51	2.1	
	第 III 世代 39名	女子大生	39	1991	1989-1992	20	19-22	0.9	
	大学生とその家族(大阪)	第 I 世代 22名	祖母	8	1933	1928-1935	77.3	73-84	3.9
			祖父	9	1932	1926-1937	78.4	75-82	2.4
不明			5	—	—	—	—	—	
第 II 世代 42名		母	19	1961	1955-1965	49.4	45-56	3.5	
		父	12	1954	1946-1960	55.9	67-50	4.4	
		不明	11	—	—	—	—	—	
第 III 世代 41名		男子大生	8	1989	1984-1991	20.5	19-26	1.4	
		女子大生	33	1990	1989-1991	20.4	19-21	0.7	
調査方法		大学講義の課題提出物の調査							
調査期間	2010年10月～2011年1月								
調査項目	家族構成、住まいの概要、生活行為の場所、使用する道具、住まいの平面図								

5.1 福岡地域

1) 調査対象の概要：家族形態は、世代にかかわらず核家族が一番多く、第 I 世代（祖父母）は 6 割強、第 II 世代（父母）は 6 割弱を占める。その他、第 I、II 世代ともに三世代家族が 3 割と次に多いが、第 III 世代では核家族の割合が 8 割弱と増加し、三世代家族は 1 割強に過ぎない。家族人数は第 I 世代が最も多く、平均家族人数は第 I 世代 6.9 人、第 II 世代 5.4 人、第 III 世代 4.5 人と減少し、現時点になるほど子どもの人数が少なくなっていることが裏付けられる。住まいはどの世代も木造戸建住宅が多いが、第 II 世代（20.5%）に集合住宅が出現、第 III 世代（30.7%）へと増加している。これら住宅の新築時期は必ずしも明確ではないが、第 I 世代は 1920 年～1940 年代が多くいわゆる戦前に、第 II 世代は 1950 年～1979 年までが多く、特に 1970 年代が多い。第 III 世代は 1970 年～現在までとなり、中でも 1990 年代が多い。居住地はどの世代も九州居住者で占められる。

2) 三世代による変化：三世代をとおして住宅の変化及び居住地域の動きをとらえると、I → II → III 世代いずれも同地域居住は 5 件、II → III 世代は 9 件のみとなり、一定の地域での住み続けは少ない。I → II 世代ともに同じ地域は 6 件、I と III 世代が同じ地域は 2 件、すなわち最

初の地域に再び戻るケースもある。住宅の形態は① I → II → III 世代ともに戸建住宅、② I → II 世代戸建住宅 → III 世代集合住宅、③ I 世代戸建住宅 → II 世代集合住宅 → III 世代は戸建住宅あるいは集合住宅の 3 つのパターンに分けられる。これらパターンのうち①のパターンが最も多く（54.3%）、次に多いのが②のパターン（22.9%）で約 1/4 を占める。③パターンの第 III 世代の住宅は戸建住宅が（14.3%）、集合住宅（8.6%）よりも若干多い。なお、集合住宅はすべて社宅、賃貸であることから、住宅の選択は職業により影響を受けていると言える。同じ地域で住み続けているケース（必ずしも同じ敷地とは限らないが）の変化として、第 III 世代にはすべて 2 階建て戸建住宅を確保しているという特徴があげられる。

今回の調査対象住宅の場合、事例 A：戸建木造 2 階 → 戸建木造 2 階（増改築・玄関 2 階に）→ 戸建鉄骨 2 階（構造・住み方変化）、事例 B：戸建木造平屋 → 戸建木造平屋（建替え）→ 戸建木造 2 階（建替え）事例 C：戸建木造平屋 → 戸建木造平屋（一部改造）→ 戸建木造 2 階（建替え）と同じ住宅に住み続けているケースは 3 例のみである。事例 C の住まいの変化を図 5-1 に示す。これらの住宅は改造、建替えにより生活の変化に対応しているが、家族人数の増減がその起因とはなっていない。

3) 住空間の構成：間取りは戸建住宅の場合、田の字型、続き間型、変形田の字型、玄関・廊下・ホール主軸型、二列型、片廊下 + n 列型、玄関直接部屋型などに分けられる。なお田の字型、続き間型はさらに土間の有無、玄関・廊下・ホール主軸型は玄関の位置（中央と端）により分類できる。一方集合住宅は n LDK 型、n L + DK 型、n LD + K 型、n LD + DK 型に大別できる。

各世代の住まいの類型の変化としては、第 I 世代は 31 件中、田の字型 + 土間あり（15 件）が一番多く、次に多いのが玄関・廊下・ホール主軸型（6 件）、第 II 世（31 件中）は玄関・廊下・ホール主軸型が一番多く（13 件）、次に多いのが田の字型 + 土間あり（7 件）、第 III

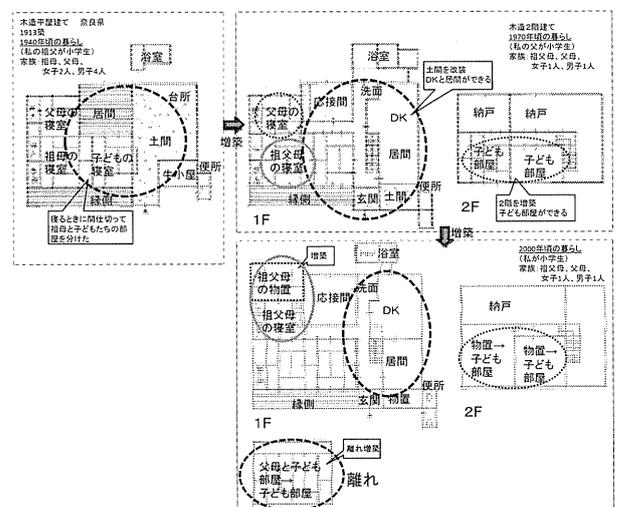


図 5-1 事例 C (福岡)

世代(27件中)は玄関・廊下・ホール主軸型(19件)が一番多い。中でも玄関が住宅の中央に位置するケースが一番多い(13件)。すなわち第Ⅰ世代で大半を占めた田の字型は第Ⅱ世代には減少し、第Ⅲ世代ではほとんどみられないのに対し、玄関・廊下・ホール主軸型は第Ⅰ、Ⅱ世代と増加し、第Ⅲ世代には7割にまで増加している。間取りとかかわる台所(いろり、かまど)、浴室・便所(くみ取り、薪の風呂)などの設備の変化としては、第Ⅰ、Ⅱ世代までは8割を占めていたくみ取り便所は、第Ⅲ世代には減少し水洗トイレに、井戸、薪の風呂、かまどはⅢ世代ではほとんどみられず、変わって給湯器の増加が著しい(41.0%)。

4) 生活の様子(生活行為の場と使用道具)

食事と就寝行為について分析した結果、食事はどの世代も自宅の共用室で、“毎日一緒にとる”が一番多い。食事の道具も第Ⅰ世代に多いちゃぶ台(65.5%)が第Ⅱ、Ⅲ世代と食卓が増加している。第Ⅱ、Ⅲ世代にこたつ3割弱、座卓2割弱いるのが目立つ。就寝は第Ⅰ、Ⅱ世代ともに親子就寝が一番多いが、第Ⅰ世代では兄弟就寝(24.1%)も、第Ⅱ世代では同性就寝(27.0%)、独り寝(24.3%)も多い。第Ⅲ世代は独り寝(17.9%)よりも同性、異性就寝(各20.5%)が若干多くなっているが、どの世代も子ども時代は家族一緒に就寝している。

5.2 大阪地域

1) 調査対象の概要：家族形態は三世代ともに核家族が一番多いが、三世代家族も比較的多い。すなわち第Ⅱ(76.2%)、Ⅲ世代(69.2%)では7割前後を核家族が占めるが、第Ⅰ世代は核家族(52.2%)が半数で、三世代家族が3割ある。平均家族人数は第Ⅰ世代6.5人、第Ⅱ、Ⅲ世代4.8人、4.7人である。住まいはどの世代も木造戸建住宅が一番多いが、その割合は8割弱→7割弱→6割弱と減少し、第Ⅲ世代では集合住宅が3割を占める。なお第Ⅰ、Ⅱ世代では、集合住宅がほとんどなく(第Ⅱ世代3件)、併用住宅、長屋住宅、木賃アパートが2割強と多いのが特徴的である。これら住宅の新築時期は第Ⅰ世代1900~1957年(1920年代以前が多い)、第Ⅱ世代は1910~1980年(1950,60年代が多い)、第Ⅲ世代は1950年~2000年(1990年代が多い)である。

2) 三世代による変化：三世代をとおして住宅の変化及び各世代居住地域の動きをとらえると、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ世代いずれも同地域は6件、Ⅱ→Ⅲ世代は7件となり、一定の地域での住み続けは少ない。住宅の形態では①Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ世代ともに戸建住宅、②Ⅰ→Ⅱ世代戸建住宅、Ⅲ世代は集合住宅、③Ⅰ世代戸建住宅→Ⅱ世代木賃アパート・併用住宅→Ⅲ世代集合住宅(3件)戸建住宅(2件)、④その他Ⅰ、Ⅱ世代ともに併用住宅・長屋住宅・木賃アパート・戸建住宅と変遷後、Ⅲ世代に集合住宅

(3件)・戸建住宅(1件)へと変遷する4つのパターンに分けられる。これらパターンのうち①と③パターンがやや多いと言える。なお第Ⅲ世代における戸建住宅と集合住宅の割合は半々で、必ずしも集合住宅に集約しているとは限らない。また第Ⅱ、Ⅲ世代ともに持家集合住宅が賃貸より若干多い。

次に三世代ともに同じ住宅に住み続けている例は4件(そのうち2件は図面不備)あるが、事例D：戸建木造2階→戸建木造2階(建替え)→戸建木造3階(建替え)と事例E：戸建木造平屋→戸建木造2階(増改築)→戸建木造2階+はなれ(増築)の2件に過ぎない。事例Eの住宅の変化を図5-2に示す。

3) 住空間の構成：戸建住宅の間取りは大きく田の字型、続き間型、前玄関(台所)n列型、玄関・廊下・ホール主軸型などに分けられる。第Ⅰ世代(14件)は田の字型と続き間型、前玄関n列型の3類型で、中でも田の字型+土間あり(8件)が圧倒的に多い。第Ⅱ世代は第Ⅰ世代の3類型の他に玄関・廊下・ホール主軸型(10件)が出現しているが、田の字型(10件)も多い。その他前玄関(土間・台所)n列型(5件)もある。第Ⅲ世代は玄関・ホール・廊下主軸型(18件)が8割を占め多いが、集合住宅も多くなり(38.5%)、しかもLD+K型とLDK型この2つの型に集中している。間取りとかかわる台所(いろり、かまど)、浴室・便所(くみ取り、薪の風呂)などの設備の変化(全対象住宅)としては、第Ⅰ、Ⅱ世代までは8割を占めていたくみ取り便所は、第Ⅲ世代には減少し水洗便所に、井戸、薪の風呂、かまどなどは全く第Ⅲ世代にはみられない。

4) 生活の様子(生活行為の場と使用道具)

食事と就寝行為について分析した結果、食事はどの世代も自宅の共用室で、“毎日一緒にとる”が一番多いが、第Ⅲ世代では毎日(58.5%)→時々(29.3%)が増加。食事の道具も第Ⅰ世代に多いちゃぶ台(68.2%)が第Ⅱ、Ⅲ世代と減少、特に第Ⅲ世代では食卓の増加が著しく、座式からいす式への変化がみられる。就寝は第Ⅰ、Ⅱ世

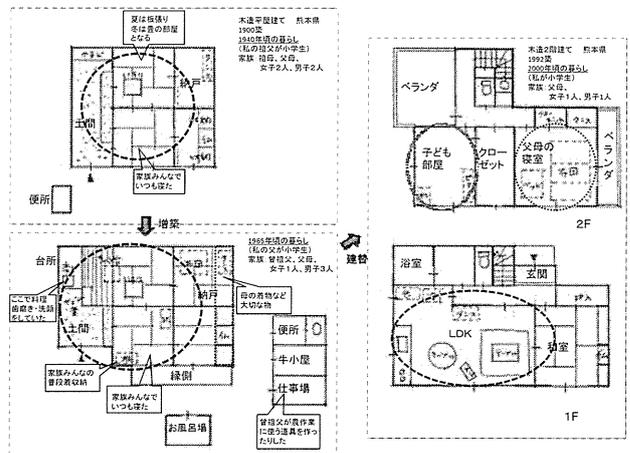


図5-2 事例E(大阪)

代ともに親子就寝が一番多いが、第Ⅰ世代では異性就寝(18.2%)も多い。第Ⅱ世代では独り寝(31.0%)が多くなるが、第Ⅲ世代でもこの率はほとんど変化していない。つまり子ども時代はどの世代も家族一緒の就寝が一般化していると言える。

5-3 福岡・大阪地域の差異

住空間の構成、新築時期、住居形態などに多少差異があるが、全体の傾向としてほとんど違いはない。三世代の住み続けは非常に少なく、調査対象者の場合住み続けによる住宅、住まい方の変化及び住宅の選択は、ライフスタイルや家族の増減に影響されているとは言えない。

6. ライフスタイルと住まいの機能

三世代のライフスタイルの変化から、各々の生活行為を見直し、住まいの機能について考察を行う(図6-1)。

継続する機能として、睡眠・食事・身支度などの日々の行為がある。この一連の行為に伴う道具である寝具、食器、衣類は、住まいに収納し装備される空間が必要である。それらに付随して炊事、洗濯と掃除の行為とその道具と空間が世代を超えて存在している。

進化した機能として、家電製品や情報機器に代表される暮らしのさまざまな道具の高性能・多機能化に起因する事象が多い。睡眠、食事や身支度の時間の制約はなくなり、仕事や勉強も時間や場所を選ばず可能となった。

淘汰された機能として、接客と家族の共同作業がある。あらたまって客をもてなす接客行為はほとんど外部化され、家族以外の人とのつきあいは接客ではなく、家族と共にする食事や会話など暮らしの楽しみへと替わっている。家族の共同作業も第Ⅰ世代には家の生業や家事、幼少の兄弟の世話などがあつたが、仕事の個人化、家事の機械化、縮小した家族では必要性が薄れている。

退化した機能として、生活時間の拡散や夜型・24時間化がある。睡眠時間は減り、過剰な仕事や勉強時間の拘束、家族のだんらん時間の減少などに現れている。

三世代の暮らしの変化の過程で、暮らしのための最低限の機能の充足から、さらなる快適性などの付加価値を

求める時代へと変化した。つまり、必需行為や拘束行為は徐々に自由行為要素が加わっていることが確認できた。

今後のライフスタイルとしては、時間は睡眠とだんらんの時間を確保し、際限のない仕事や勉強は、ワークライフバランスの視点が必要になる。人との関係は協力し合う必要性が薄れ個別化が進んでいるが、各自が他の人や社会への思いやりの配慮が必要である。道具は、高性能・多機能化が著しいが、手作りや自然環境に則した生き方を見直す必要がある。空間は接客と趣味空間は住まいだけにとどまらず外部へと広がっている。

以上のことから、住まいには生活行為に適応した緩やかな可変性や自由度が求められる。さらに暮らしを安定化させるための日々の変化に合わせて追従できる住まいであれば、家族が永く同じ地域に住み続けることが可能となる。

7. おわりに

住まいの機能は多くが社会化・外部化され、その質も大きく変化してきたことが、学生の聞き取り調査の記述内容から明らかとなった。暮らしと住まいは、行為、空間、道具、人(家族)、時間の5つの基本軸で把握することにより、その意味や意義、課題が見えてくることを明らかにした。学生は親や祖父母に聞き取りをすることにより、連綿と継がれてきた生活技術や生活文化の価値の理解と同時に、廃れたり無くなったり、改変したりしてきた住まいの実情を深く認知したことが、本研究の最大の収穫である。その効果は10年先、20年先になると思われるが、少なくとも、持続可能な住まいはハードの住宅だけではない、むしろ住まい方にあるということに気付いた点であろう。

<参考文献>

- 1) 多羅尾 恵, 藍澤 宏, 鈴木直子: 世代間の関係からみた多世代家族の住まい方の継承に関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集 E-2, pp.147-148, 1998.7
- 2) 山野目久子, 長澤由喜子, 本間博文, 福井正明: 地方中都市における伝統的住居の住まい方に関する一考察—現代住居との比較における家族の生活行動分析を通して—, 日本建築学会東北支部研究報告集, pp.211-214, 2007.6
- 3) 加茂みどり, 高田光雄: 「個人化」に対応した住戸の空間配列と生活の適合性に関する研究—実験集合住宅 NEXT21における居住実験を通じて—, 日本建築学会計画系論文集, No. 596, pp.13-19, 2005.10
- 4) 高木真人, 小川一人, 仙田 満: 昭和期住宅の廊下空間における機能に関する研究—縁側・廊下におけるこどものあそび行為の変遷を中心として—, 日本建築学会計画系論文集, No. 507, pp.95-101, 1998.5

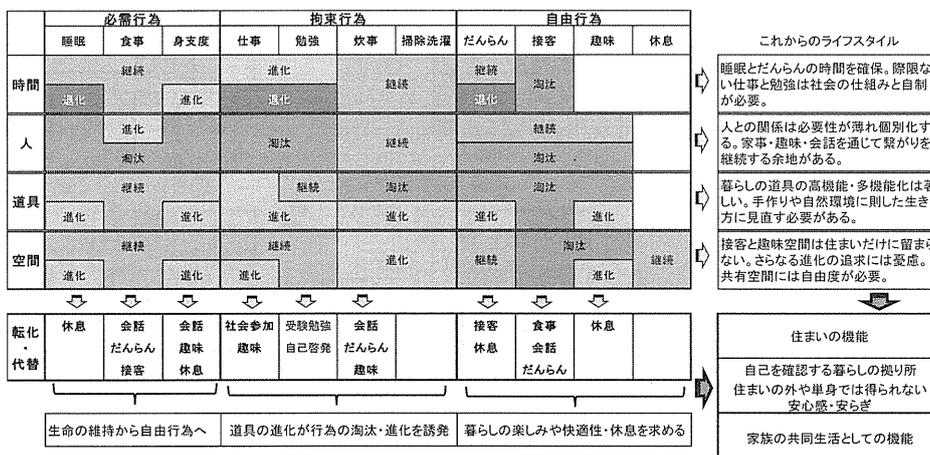


図6-1 生活行為の変化と住まいの機能